顔刺激におけるメガネの有無が記憶に及ぼす効果

中垣内　遼

本研究は，顔刺激の学習時と再認テスト時における眼鏡の有無と観察者の学習時の記憶意図の有無が顔の再認記憶に及ぼす効果を調べることを目的とした。眼鏡は視力矯正器具であるとともにアクセサリーとしての側面もあり，現在では多くの人が日常的に着用して生活している。眼鏡を着用すると顔の見た目に変化が生じるが，それによって顔の記憶のしやすさに影響はあるのだろうか。我々は，よく見知った人物の顔であれば，眼鏡を着用していない状態と眼鏡を着用している状態を見ても，比較的容易に同一人物の顔であると判断できるだろう。しかし，初めて目にする顔（未知顔）の場合はどうだろう。本研究では Terry(1994)が実施した実験を参考に，教示の種類，眼鏡の着脱を操作し，学習意図と眼鏡の着脱による記憶への影響を検討した。

方法　参加者間要因として教示変数（3 水準：偶発的記憶群，意図的記憶群 a，意図的記憶群 b）と，参加者内要因として眼鏡変数（4 水準：学習時 Off/再認テスト時 Off 条件，学習時 Off/再認テスト時 On 条件，学習時 On/再認テスト時 Off 条件，学習時 On/再認テスト時 On 条件）とを，独立変数とした 2 要因混合計画の実験を行った。教示条件の偶発的記憶群は学習時に顔を覚えるよう教示されず，顔の形状判断を行った後に偶発的な記憶成績が測定される群であった。意図的記憶群 a は顔を覚えるよう教示され，意図的な記憶成績が測定される群であった。意図的記憶群 b は顔を覚えるよう教示されるとともに学習時・テスト時に眼鏡の着脱変化が起こることを知らされ，眼鏡の着脱を想定した場合の意図的な記憶成績が測定される群であった。学習時 Off/再認テスト時 Off 条件は学習時とテスト時ともに顔刺激が眼鏡を着用していなかった。学習時 Off/再認テスト時 On 条件は学習時に眼鏡を着用していない顔刺激にテスト時眼鏡を付け足した。学習時 On/再認テスト時 Off 条件は学習時に眼鏡を着用していた顔刺激からテスト時に眼鏡を取り除いた。学習時 On/再認テスト時 On 条件は学習時とテスト時ともに顔刺激が眼鏡を着用していた。ただし，眼鏡は全て同一のデザインであった。

結果　実験の結果，教示の効果が見られず，顔の記憶の正確さには観察者の学習時の意図が効果を及ぼさないことが示された。眼鏡条件の効果を見ると，先行研究と同じく学習時 On/再認テスト時 Off 条件において記憶の感度が低くなった他，学習時 On/再認テスト時 On 条件の感度が他の条件よりも高くなった。これによって初めて見た時と次に見た時の両方で眼鏡を着用している顔は正確に再認しやすくなる可能性が示された。学習時 On/再認テスト時 On 条件の反応バイアスの値は学習時 Off/再認テスト時 Off 条件と学習時 Off/再認テスト時 On 条件より低く，学習時とテスト時ともに眼鏡を着用している顔は，観察者が「見たことがある」と進んで判断する傾向があることが示された。 また，眼鏡を着用していない顔刺激に対する誤警報率よりも眼鏡を着用した顔刺激に対する誤警報率が高く，眼鏡を着用した顔はよく似たものとして知覚され，記憶の中で混同されやすくなる可能性が示された。（基礎心理学）